

## ウィリスの足跡を追って

新名主 聡

ディレクター, 株式会社南日本放送

### Following a Footwork of Willis

Satoshi SHINMYOZU

Director, Minaminihon Broadcasting Corporation

シーボルトやポンペは知っていても、彼等以上に日本近代医学のために尽くしたウィリアム・ウィリスについてはほとんど知られていない。その人物が西郷や大久保と接触しながら同じ時代を生きたことなど、地元鹿児島県民ですら知る人はわずかである。

鹿児島大学医学部創立50周年、合わせてMBC創立40周年を記念して、ウィリスの医療にける熱き魂を描くルポルタージュを制作にすることになった。資料収集や調査など番組の準備を始めたのが放送日(平成5年7月)のおよそ1年前のこと。ウィリスに関する著書もある故佐藤八郎先生もこの頃は、まだお元気で、ヒポクラテスの名言が飾られてある応接間にすべての資料を出して、ウィリスの生き様を熱っぽく語ってくださった。話は戊辰戦争でのウィリスの話となり、戦場に自ら赴いたその敢闘精神と敵味方なく治療した赤十字精神を強調しておられた。「よほどの腹をもった男だったでしょうね」とあの大きな目を輝かせながら言われた言葉が印象的である。もう一人ウィリスをよく知る方がいた。佐藤先生の勧めでウィリスの生いたちを調査し、日本人として初めてそのふるさとを訪れたという尾辻省悟先生である。びっくりしたのはご自身で書き写したウィリスの遺書をもっておられたことである。幽明定かならぬ時代に日本、シャムと渡り、相当な財を築いたウィリスだが、死の床にあって頭にあったのは自分の兄弟や日本に残してきた妻八重のこと、ロンドンで混血児のために苦しい生活を強いられている息子アルバートへの限りなき愛情である。尾辻先生は遺書を書き写しながら涙されたという。私のウィリスにもったイメージは、強じんな精神力をもちながらもどこかで家庭的な愛情に飢えていた大男だった。番組のタイトルは「遙かなるアルスターマン」。アルスターマンとは冒険好きな北アイルランドの男を指す。番組のテーマは「ウィリスの生き様が問いかける現代へのメッセージ」。かくして番組制作が始まった。

100年以上も前に生きた人物をよみがえらせることは実に難しい。特にテレビは映像化しなければならない。説明だらけのナレーションが続いても面白いものは期待できそうにない。ウィリスが幼年時代を過ごした北アイルランドと大学時代を送ったエジンバラの取材日程は決まったものの、この番組独自のリポーターが決まらず「うつ状態」が続いていた。可能ならば、日本人ではなくイギリスかアイルランドの人を起用したいと考えていた。MBC国際室を中心にいろいろ探した結果、以前、鹿児島県国際交流課でアイルランドの女性が働いていたという。早速連絡したところ、ウィリスの育った町の近くに彼女は住んでいた。かつて鶴丸高校で英語を教えていた時にウィリスのことは耳にしたというのだ。エイドリアン・ダービーというアイルランドで小学校の先生をしている彼女は、大いに関心を示してくれ、幸いにもウィリスと同じ土地で育った人がリポーターとして番組に登場することが決まり、いよいよ北アイルランドへと取材に向かった。

エニスキレン…ウィリスの生まれ育った町である。カトリックとプロテスタントの宗教対立の激しいベルファストの町から高速バスで内陸部へ1時間のところにあるこの町は、目にしみるようなあざやかな緑の牧草地と青々とした湖沼が点散する美しい田園地帯にある。どこからかアイルランド民謡「庭の千草」が聞こえてきそうである。ウィリスはエニスキレンのモニーンで育っている。モニーンのあちこちに見られるのは100年以上も前に建てられた石造りの家。いまだに現役として使われているのである。今はトタン屋根だが昔はワラぶきだったという。ウィリスの幼年時代に思いを馳せながら、人々が集まるモニーンのパブに行ってウィリスについて取材を始めた。バイオリンを弾いたり笛を吹いたりして家族ぐるみで楽しむ農村のパブ。土地の古老の顔も多く見られ、ウィリスの写真を手に尋ねて見た。「100年も前にこの村から日本に行った男がいたのか」「この国は貧しかったから、男たちは夢をもって外にとび出したと思うよ」誰もウィリスを知らない。「同じような写真をすぐ近くのパブで見たと」だが、そのパブにあったのは別人の写真だっ

た。翌日もモニーンの町のあちこちでウィリスの手がかりを尋ね歩いてみたものの、牧師さんも知らない。逆に、はるばる日本からやってきた取材スタッフが町のあちこちに出没するために、3日目にはエンスキレンの町中に知れ渡り、街を歩けば視線が集中し、ある所ではウィリスを知るところか、「生きている日本人を初めて見た！」と握手を求められる始末…。気は焦りながらも尋ね歩く間に、リポーターのエイドリアン・ダービーさんは、ウィリスに強くひかれるものがあったのか、まさに寝食を忘れたかの如く手がかりを探してくれていた。エンスキレンに滞在して4日目のことである。取材スタッフのことが町中に知れ渡ったことが巧を奏するのである。一人の郷土史家との出会いがエンスキレンに残るウィリスを偲ぶすべてのものをテレビカメラに収めることができた。育った家はその後ずっと使われていたものの、現在は廃屋となっていた。中に入ると明らかに100年以上のものと思われるローソクの台や戸棚の彫刻が残っていた。そこから歩いて10分のところにはウィリスが息をひきとった兄の家が残っていた。今も人が住みウィリスが最期を過ごした部屋は二階にあった。現在はほとんど使われていないそのゲストルームには準備したかのようにベッドが置かれ、そのベッドからは窓ごしに咲き乱れるタンポポの野原が広がっていた。「ここで息子のことや妻八重のことを思って亡くなっていったのでしょうか」エイドリアン・ダービーさんが目をうつろにしてつぶやいた。家主の話によれば窓ガラスや窓ワクもすべて当時のままだった。近くには「ウィリスの小径」という絵画にでも出てきそうな美しい散歩道もあり、そこを歩きながら、案内してくれた郷土史家の「このあたりは村全体が100年前とほとんど変わっていないでしょうね」という言葉に、取材スタッフもタイムスリップの感動に震えた。最後に取材したのは墓である。なかなか見つからなかっただけに墓標に「ウィリアム・ウィリス」の文字を発見した時は、とびあがらばかりだった。ダービー嬢は感激のあまり、しばらくは墓標に顔を近づけて「ウィリス」の文字に触れていた。

ウィリスは兄ジョージに感化され、エジンバラ大学医学部へと進む。石畳の敷きつめられた街のあちこちにダーウィン、ベルなどこの街が輩出した偉人の銅像が立つ。その背後にはなんと6世紀に築かれた城が残っている。エジンバラ大学医学部もウィリスの時代のまま威厳を保っていた。図書館、講義室、そしてウィリスの直筆も目のあたりにした。潰瘍に関する学位論文には担当教授の「極めて明快な試論」の評も書かれてあった。学籍簿にのっていた住所をメモして大学近辺を探したところ、100年以上たった今でも「パトリックガーデン16番地」は残っている。英国人ナイチンゲールが、クリミア戦争で敵味方なく献身的な看護活動を行ったのは、ウィリスが医学生のところである。日本での医療活動で発揮されるボランティア精神は、敬虔なキリスト教徒だったウィリスの心に、「人道的精神」が強く根づいていたためだったのかもしれない。

エジンバラ大学卒業後、ロンドンのミドルセックス病院で働くことになる。伝統あるこの病院の近くに英国人でただ一人、ウィリスの日本での活躍を本にまとめた方が住んでいる。「Dr. ウィリス・イン・ジャパン」著者は前英国駐日大使だったサー・ヒュー・コータツツイ氏である。コータツツイさんはウィリスの手紙をもとに上梓されたという。故佐藤八郎先生と親しかったコータツツイさんは流暢な日本語でインタビューに答えてくださった。

英国や北アイルランドの取材分は、番組のおよそ半分。あとの半分はウィリスの日本での足跡を追うことになる。「生麦事件」で負傷した英国人治療に、最初に駆けつけたのがウィリスであったこと。神奈川県川崎市にあるその現場は今や日本有数の交通量という道路であった。京都相国寺内にある養源院には、戊辰戦争の発端となった鳥羽伏見の戦いで重傷を負った兵士の手術（日本初の西洋の外科手術）がウィリスによって行なわれた本堂が残っていた。その柱には傷ついた兵士が戦いに不出られぬ悔しさからだったのか刀で切りつけた跡が生々しかった。ウィリスは戊辰戦争では薩摩軍の依頼で福島県会津若松まで赴いている。この地でウィリスは味方だけでなく、会津軍の兵士や負傷した一般民衆の治療も行なったという。当時は寺や庄屋の大きな家の前に「天朝病院」の旗を掲げて仮の病院とした。会津若松市の郊外「御山町」には地元の人々から“かんじゃの家”と呼ばれている古い家が三つ残っていた。“かんじゃ”とは“患者”を指すのであろう。その古い大きな“患者の家”の前の道は“患者坂”と呼ばれていた。ウィリスの敵味方の分け隔てなく治療し、捕虜への人道的な処遇は、後に「ヒューマニズム」という、それまで日本にはなかった尊い精神をもたらす。特に会津若松の人々はウィリスの医療活動に強い感銘を受ける。会津藩家老の娘だった山川捨松は後に日本初の看護学校を東京に設立する。病院の重要性を認識させられた会津の人々は、明治、大正、昭和と病院設立の運動を続け、今では人口に対して最もベッド数も多く、看護学校の生徒数も日本一である。

残念ながら鹿児島にはウィリスを偲ばせるものはあまり残っていない。医学校のあった浄光明寺も新しく建て替えられ、通称「赤倉」も戦災で焼け落ちてしまっている。戦前から滑川に住む人に、その色、形、高さをかろうじて聞くことができた。黎明館の中にはウィリスに関するコーナーがあるが、そこには赤倉の建築材料である赤レンガの一片の他、妻八重と息子アルバートの写真、ウィリス所持の幕末の風俗写真集などが展示されていたが、収蔵庫の奥深く大変貴重なものが保管されていた。西郷がウィリスに贈った脇差である。明治新政府の英国医学から独医学への転換により、当

時東京医学校（現在の東大医）を設立したウィリスはその功績にもかかわらずお払い箱になる。失意のどん底にあったウィリス。それを救ったのが、われらが西郷どんと大久保どんなのである。特に西郷はウィリスを励まし、鹿児島で腕をふるうよう請い願ったという。ウィリスが鹿児島に来てからも篤い交流があった。この協差はそのころ、西郷からウィリスに渡ったものなのかもしれない。もっとリアルなものが、もう一つあった。ウィリスが戊辰戦争の際、会津などの戦場で用いた外科手術の器具である。鹿児島市の歯科医野添氏が家宝のようにして見せていただいたが、100年も前の医療器具かと思まごうばかりの精巧さ（英国製）である。つい最近まで野添氏の御尊父が使われていたものもあった。

ウィリスの孫にあたる女性が大阪で暮らしている。鹿児島おごじょ、八重との間に生まれた息子アルバートの子供にあたる方である河内まり代さん（旧姓マリア・ウィリス）は、父アルバートが混血児として味わった辛酸を思う度に、祖父ウィリアム・ウィリスを恨んだ。「日本人との間に子供をつくっておきながら、あまりにも無責任なのは」河内まり代さんも、女学生の頃混血児扱ひされたものの、気丈な彼女は強く生きてきたのだった。しかし、祖父ウィリスへの疑念を晴らしてくれたのは、あの遺書だった。八重とアルバートの生活を安ずるウィリス、遺産分与のこと、並々ならぬ愛情の言葉を目のあたりにした時、河内さんの長年にわたる胸のつかえがとれたのだと切々と語ってくださった。

「遙かなるアルスターマン」。この番組の最後には内容と深く関わった三人の登場人物の言葉を現代へのメッセージとした。私の質問は、こうだった。「ウィリスの生き様は現代に何を投げかけているのか」。アイルランド人リポーター、エイドリアン・ダービーさんは「為せば成るの精神をもって、この国際化時代、海外にとび出す気概を若者にもってほしい」前英国駐日大使のサー・ヒュー・コータッツィ氏は「日本の医者は、紛争地や難民のあふれている所に積極的に行こうとはしない。国境なき医師団に多くの人々が参加してほしい。」そして、故佐藤八郎先生は「いくら医療機器が進歩したところで、医師は患者との基本的な接触を怠ってはならないのです。人を見るということはその心を見るということなのですから。」

番組が放送されたころは佐藤先生の体調はすぐれなかった。それでも放送直後に「大変でしたね。ご苦労様」と若輩者の私に、わざわざ労いの電話をくださった。佐藤先生の大きなそして優しい人間性にひかれていた故に先生の死は肺腑をえぐられるようだった。

尾辻義人先生から出版されたばかりの厚い本をいただいた。「フィラリア～難病根絶に賭けた人間の記録～（小林照幸氏著）」。そこには、鹿児島の風土病ともいふべき、フィラリアの実態調査と根絶にかけずりまわる若き佐藤先生の姿があった。それ以来、私はウィリアム・ウィリスと佐藤八郎先生の生き方、人間としての魅力が重なって仕方がない。

この取材をめぐり、鹿児島大学医学部をはじめ同大学第二内科同門会の皆さんなど多くの方々に協力をいただき、心から感謝しております。ウィリアム・ウィリスの精神が脈々と生きる鹿児島大学医学部から、人間味あふれる素晴らしいドクターが育っていき、「県民のための病院」であり続けるよう祈ります。